

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

「戦争・軍隊をジェンダーから問う」にあたっては、「軍事主義」「軍事化」「家父長制」など、いくつかの重要な分析概念が必要となる。

英語圏の研究では、*militarism* という分析概念がよく用いられる。『新社会学辞典』において、*militarism* とは軍部が「文民統制の枠をこえて政治に干渉し、あるいは直接政治権力を握り、教育、経済、文化など国民生活の全領域を戦争準備のために統制する」ような支配体制を指すとされ、「軍国主義」として立項されている。その典型例に両大戦時のドイツ、明治以降の日本があげられているように、この訳語はわたしたちの想像力をだいぶ

1

なものにしてしまう。

イギリスのジル・ステイーンズによるフェミニスト国際関係論の教科書は、*militarism* を「戦争を高く価値づけ、そうすることで国家暴力を正当化するのに役立つイデオロギー」と定義する。それはまた「戦争と戦争準備をめぐって組織される一連の社会関係であり、戦時にも平時にも起こる」。

ソ連崩壊後のロシアにおける徴兵政策およびチェチェン紛争と男性のアイデンティティを分析したカナダのフェミニスト^{*}IR研究者マヤ・アイクラーは、*militarism* を「国家や社会に対する軍隊の優位を意味するというよりもむしろ、国家や社会における軍隊とその人員の中心的役割を高めるイデオロギー」として定義する。このイデオロギーが、軍事予算を増やしたり、軍事専門職のための社会政策を策定したり、徴兵制を敷くこともある。

彼女たちが大きな影響を受けてきたシンシア・エンローは、*militarism* をさらに広く、次のような想定、価値観、信念の束として捉える。

- ① 軍事力は緊張状態の究極的な解決策である。
- ② 人間は争うものである。
- ③ 敵がいることが自然状態である。
- ④ ヒエラルキー的関係が効果的な行動を生み出す。
- ⑤ 軍隊のない国家はナイーブで、十分近代的ではなく、正当性を欠く。
- ⑥ 危機の時に女性的な人びとは武力による保護を要する。
- ⑦ 危機の時に武力的暴力行為に従事することを拒む男性は、男らしい男性としての地位を危うくする。

こうしたフェミニスト研究者たちの定義では、*militarism* を有する主体は「国」に限定されない。人も制度も共同体も *militarism* を有し、ある特定の世界観や人間観をもとに、何がよいか、正しいか、適切か、何が悪で、間違っていて、不適切かを判断する。国家をこのイデオロギーの所単位とし、戦前のドイツや日本といったいわば極限例にイメージを集中させてしまうことを避けるため、わたしは *militarism* に対して「軍国主義」ではなく「軍事主義」という訳語をあててきた。

「軍事主義 (*militarism*)」が静的で固定的な概念であるのに対し、「軍事化 (*militarization*)」は勢いを強めたり弱めたりするプロセスに注目する動態的な用語である。ふたたび『新社会学辞典』を紐解けば、それは「人的、物的な軍事力の増強だけではなく、軍事的思考や行動様式が政治、経済、社会、文化等広い範囲に大きな影響を及ぼすに至る過程」だとされ、「支配の様式や形態が治安的発想や行動に基づいているかぎり、軍事化が進行しているといえる」ので、この概念は軍国主義や軍事体制や軍事政権とは異なる、とされる。

たとえ戦争状態にない平時であっても社会は軍事化しうるし、逆に戦争が終結したとたんに社会から軍事主義が消滅するわけでもない。「軍事化」という用語を使うことで、戦時／平時という二分法を超えて、2 を把握することができるのである。

試みに、軍事化を、政治的軍事化、経済的軍事化、社会・文化的軍事化という三つの側面にわけて考えてみよう。

政治的軍事化とは、軍部が次第に発言権を増し、文民に対する優位を確立していく過程を指す。このプロセスには、組織としての軍隊とそこに属する軍人、文民として位置づけられる国会議員や背広の文官などが関与するだろう。

経済的軍事化とは、兵器の技術革新や軍備拡張が進み、軍部と軍需産業の共生関係である軍産複合体が巨大化していく過程である。このプロセスには、技術革新の担い手である科学者、兵器産業の重役やこれを支える末端の工場労働者、そして国防予算の規模を決定する国家官僚などが関与するだろう。

社会・文化的軍事化とは、軍隊領域が市民領域との関係を強め、軍事主義的な理念や価値規範が市民社会を支配していく過程だ。この三つ目のプロセスに関与する人びとについて考えはじめると、その範囲をかぎりなく広げられることに気づく。

たとえば、ここには、軍隊出入りの業者を含めることができる。今日、多くの軍隊が糧食やクリーニングなどの非軍事的業務をアウトソーシングすることによって、軍隊領域と市民領域を分かち線はますます曖昧になっている。この境界の相互浸透を、社会・文化的軍事化と呼ぶことができるだろう。また、新人研修の一環として自衛隊への体験入隊を社員に課すことを思いついた中小企業の社長、「民間の優れた専門技能の有効活用」を謳った予備自衛官補に名乗りをあげたOL、自衛隊の協力のもとに製作された映画のスタッフや俳優たち——彼ら／彼女らを社会・文化的軍事化の担い手として数えあげることができる。

軍事化をこうした三つの過程の複合状態として見るならば、「人的、物的な軍事力」としての兵士の人数や兵器の整備状況、あるいは国家予算に占める国防費の割合にのみ注目して軍事化を論ずることがどれほど分析の幅を狭めてしまうことになるかわかる。軍部のプレゼンスに示される「政治的軍事化」にのみ目を奪われていたのでは、上述したような「社会・文化的軍事化」が戦後の日本において進行してきたことを意識するのは難しい。また、冷戦後のグローバルな軍縮を「経済的軍事化」の側面のみから論じれば、世界中で削減された七〇〇万人もの国軍兵士が、民間軍事安全保障会社（PMSC）への労働供給源になったという「社会・文化的軍事化」は見落とされてしまうだろう。

エンローは、研究をはじめた当初、自分の分析には「軍事主義」と「軍隊」という二つの概念を使えばそれで事足りると考えていたと言う。だが「軍事主義」はあまりにも静的な概念で、大衆やエリートの考えを測定することはできても、彼らの想定に変化が起こる理由や過程を説明できなかった。こうして用いられたのが「軍事化」だ。彼女にとって、軍事化は、軍事主義を社会のなかに浸透させる多次元的な過程である。それは「何か徐徐に、制度としての軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」だ。この「何か」には、人はもちろんのこと、モノもアイディアも、ありとあらゆるものが入ることになる。

軍事化はたいてい「平時」と呼ばれる時に起こるものだし、軍事化される人びとの大半は軍服を着ていない。軍事化は、爆弾や迷彩服から遠く離れたところにいる人びと、モノ、概念の、意味や用法を変えていくのである。

それでは、軍事化はジェンダーとどのように関わっているのだろうか？ まず、男性とは本来的に女性よりも暴力的なものだといった本質主義的な見方で、軍事化の担い手を考えることを退ける必要があるだろう。

もしも男性が本来的に暴力的であるならば、世界中の新兵募集係は悠然と机の前で若い男たちが志願してくるのを待てばよいのだし、なにも時間をかけてまどろっこしい基礎訓練などやらずとも彼らは「生来の戦士」として立派に機能するはずなのだ。

だが、歴史はそうではなかったことを伝えている。近代国民国家の多くがその初期に徴兵制を敷いたのも、選択に任せれば大半の男たちが国軍に参加することはないだろうと見こんだからである。実際、日本でも、明治政府が徴兵制を開始した時には各地で徴兵反対暴動が起こったし、徴兵キヒのさまざまな試みは昭和にいたるまでつづけられた。そして、軍隊が「少年を『男』にする」ための徹底した訓練を要したことは、「少年」が「生来の戦士」などではなかったことを示す。すべての男性が軍隊や戦争から利益を得ているわけではないし、男性が生来暴力的であるというのは、女性が生得的に平和志向を有するというのと同じ

3

なのである。

したがって、次のように問いを立てる必要がある。軍事化は、男性の軍事任務を調達し、戦争をシユビよく遂行するために、男性や女性、「男らしさ」や「女らしさ」をどのように操作すること、スムーズに進んできたのだろうか、と。

「軍事化とジェンダー」というテーマに取り組んできた研究者たちの仕事は、軍隊内の性差別的慣行や女性の戦争参加の史実の掘り起こし、戦争がもたらす加害と被害のジェンダー非対称性を明らかにすることにはとどまらない。その仕事は、生身の男女のみならず、男らしさと女らしさの觀念が軍事化をどのようにクドウさせてきたのかを一貫して暴いてきた。

若い男性に女性や子どもを保護するために戦うよう呼びかけ軍隊に召集すること、その際、外国に侵される女性身体として祖国をイメージさせること、「他者」の侮辱を通じてつくられる軍隊の男たちのホモソーシャルな絆、それと表裏一体の女性嫌悪と同性愛嫌悪に由来するハラスメントや暴力。こうした事象のコンカンには男らしさと女らしさの觀念がある。

戦時のレイプや性奴隷、武力紛争における敵と味方の描写にも、ジェンダー化されセックス化された表象が満ち満ちている。名誉ある雄々しきわれわれの男たちに対し、トウサク的で不能な彼らの男たち。貞淑でか弱きわれわれの女たちに対し、淫乱で油断のならない彼らの女たち。戦闘地帯や難民キャンプでの生存のためのセックス、基地周辺の兵士が「休息と娯楽」のために買う性的サービス。武器の名前から軍事作戦にいたるまで、物語はジェンダー化されセックス化された言説であふれかえっている。

男らしさが国家暴力への支持を調達するように、国家は男らしさと軍事主義の結びつきを維持しようとして心を配る。男子徴兵がある場合には、任務に就くことに不安をおぼえる男性や、徴兵を時間の無駄だと感じたり国家権力の濫用と見做したりする男性には、非合理的、男らしくない、転覆的とレッテルを貼らねばならぬ。勇敢、タフ、大胆、名誉、強さ、勇気を強調する戦士の男らしさを参照しつつ、武力行使に従事しない（できない）者を、弱き者、（男性の）保護を必要とする者と

して女性化する。軍事化された国家であればあるほど、男らしさを軍事化しつづけるために、かなりの文化的・法的・言説的資源を費やすのである。

だが、軍事主義に文化的インフラを与えるのは男らしさだけではない。女性も物質的、イデオロギー的に、社会の軍事化に貢献している。女性は男性に男らしく行動するよう促すうえで決定的な役割をはたすのだ。

母として多くの女性たちは少年を男に変えるうえで重要な役割をはたしている。恋人や妻として、あるいは性的サービスを提供する売春婦として、異性愛の女性たちは男らしさを支える。軍事任務に経済的機会を見出しその仕事にプライドを感じる女性兵士は「男性資源^{マンパワー}」の不足を補ってくれる。なかには軍事化された男らしさを模倣し、その正当性の強化に貢献する者もいるだろう。

国家と軍隊は男性が進んで軍事任務に就くよう策略をめぐらす^Dが、その努力のなかにはつねに、そのような男性を女性たちが進んで支えるようにする策略も含まれてきた。国家は軍事主義と男らしさを結びつけることに利益を有し、そうするためにさまざまな女らしさを構築するのだ。国家が戦争を遂行しその正当性を得られるかどうかは、経済的資源や軍事的技術や世論といった要素のみならず、男女を特定の軍事化されたジェンダー役割に配置できるか否かにかかっているのである。

なかには、軍事化の原因を「家父長制」と名指すフェミニストたちもいる。ベティ・リアドンは、性差別と戦争システムはいずれも社会的暴力として因果関係にあるとして、ジェンダー秩序と軍事主義の相互依存性を論じた。フェミニスト平和研究者として、彼女は、女性に対する暴力を生み出す根本の問題、原因について掘り下げる必要がある^Dと言^Dい、制度としての家父長制に対峙していく必要性を訴える。

シンシア・コウバーンも、ジェンダー関係を軍事化と戦争の根源的要因として考える論者の一人である。戦争が、石油資源のために戦われたり、国の独立のために戦われたりするように、ジェンダー問題のために戦われるわけではない。そうではなく、家父長制的なジェンダー関係が暴力の導火線のように機能することで、戦争に適した状況をつくりあげ、平和を持続することを困難にするのだ。

コウバーンはフェミニストのなすべき作業は戦争を、寝室から戦場まで、わたしたちの身体と自我を否認するひとつづきの暴力として描き出すことだと言う。彼女は暴力を、家庭内暴力から軍隊の暴力、国家の暴力にいたる連続体として捉えるのだ。多くの女性にとって、安全とは他国から国境を守ったり他民族の人びとを町から追い出したりすることより、自分の家で男たちにふるわれる暴力から逃れる道を探すことで得られること、戦時レイプは戦時の突発的な異常事態ではなく、平時の性暴力の連続線上に起こるものであることはたしかである。

リアドンもコウバーンも、ジェンダーの権力システムについて話す時、フェミニストが「家父長制」という用語を使うことを躊躇^{ちゅうちよ}するようになったことに苛立ちを持っているようだ。かつて、

チャンドラー・タルパデー・モーハンティーは、異文化を横断し、単一の家父長制という概念を用いて「性的差異」を分析する西洋フェミニズムを批判するなかで、彼女たちが抵抗しようとする「普遍的な家父長制」は、均一で非歴史的な権力構造などを仮定しないかぎり、存在しないと述べた。今日のフェミニスト平和研究は、ジェンダーを分析する際に、文化・イデオロギー・社会経済的条件についての分析を欠かすことはできないという認識を共有している。ここでは「家父長制」はかつてのように理論先行としてあるというより、歴史化され文脈化された経験的研究の結果としてふたたび選り取られたものとしてある。エンローも同様に「家父長制」概念を手放さずに用いている一人である。彼女はある特定の男らしさを、それ以外の男らしさとすべての女らしさに対して特権化することを「家父長制」とし、それがどのように軍事主義の原因となり、軍事化を推進してきたのかを精力的に分析しつづけた。

(佐藤文香『女性兵士という難問』)

* I R……International Relations (国際関係) の略

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① キヒ

ア 過去のヒレイを詫びる

イ モクヒ権を行使する

ウ 夏はヒシヨ地で過ごす

エ ヒコクの無罪が確定する

② シュビ

ア 新たなアシユを発見する

イ シユセキで卒業する

ウ シユシヨウな心がけだ

エ 試合のシユドウ権を握る

③ クドウ

ア お金のクメンに奔走する

イ 悪貨は良貨をクチクする

ウ クセツ十年を懐古する

エ クオンの理想を追求する

④ コンカン

ア 経営のカンブが出席する

イ 店内はカンサンとしている

ウ 趣味は音楽カンシヨウだ

エ 最後のカンモンを突破する

⑤ トウサク

ア ヒットウ株主になる

イ トウワクした表情をする

ウ 講演者がトウダンする

エ 社会主義にケイトウする

問二 二重傍線部 i ⅰ iii の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア ⅰ エのうちからそれぞれ選びなさい。

i 究極的

ア 最終的な地点まで達しているさま

イ 最も有益な効果が期待できるさま

ウ はじめから他の選択肢がないさま

エ 規模が大きく勢いが甚だしいさま

ii アウトソーシングする

ア さらに強化する

イ 国外に移転する

ウ 多種多様にする

エ 外部に委託する

iii 悠然と

ア 暇を持てあました様子

イ 知的で余裕がある様子

ウ 落ち着いている様子

エ 長時間耐えている様子

問三 空欄 1 ⅰ 3 に入る最も適切な言葉を、次のア ⅰ エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 ア 絶対的

2 ア 平和へのプロセス

3 ア 神話

イ 男性的

イ 社会の微細な変化

イ 本質

ウ 限定的

ウ 戦時下の軍事主義

ウ 差別

エ 汎用的

エ グローバルな戦争

エ 真理

問四 傍線部A「わたしは *militarism* に対して「軍国主義」ではなく「軍事主義」という訳語をあててきた」とあるが、それはなぜか。次のア～オのうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 戦前のドイツや日本の支配体制は極限例であり、このような極端な *militarism* は「軍事主義」と呼んで区別する必要があるから。

イ 国家が戦争準備のために国民生活の全領域を統制することがないよう、人や制度や共同体が *militarism* を有するべきであるから。

ウ 軍事予算を増やしたり徴兵制を敷くなどするのは国家ではなく軍部であり、軍部のイデオロギーこそが *militarism* であるから。

エ 何がよいか、正しいか、適切か、何が悪で、間違っていて、不適切かを判断するイデオロギーを国家が占有するべきではないから。

オ *militarism* は戦争を正当化する想定、価値観、信念の束であり、そのイデオロギーを所有するのは国家だけとは限らないから。

問五 傍線部B「政治的軍事化、経済的軍事化、社会・文化的軍事化という三つの側面」とあるが、著者が軍事化を三つの側面に分けて考える理由について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 軍隊領域と市民領域の境界線が分かりにくく、両者が浸透しあうプロセスに関与する人びとが広く存在すると考えられるため。

イ 文民に対して優位を確立していく軍部のプレゼンスに目を向けることで明らかになるのは、軍事化の過程の一面にすぎないから。

ウ 企業による自衛隊への体験入隊や自衛隊の協力による映画制作などを通じて市民が徴兵されている複合状態を明らかにするため。

エ 科学者や兵器産業の重役、工場労働者、国防費を決める官僚らが関わる軍産複合体が巨大化していく過程も注視する必要があるから。

オ 軍事化は平時に起こりうるものであり、爆弾や迷彩服から離れたところにいる人びと、モノ、概念に浸透していくものであるから。

問六 傍線部C「男らしさ」や「女らしさ」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 国家と軍隊は男らしさと軍事主義の結びつきを維持しようとするため、女らしさを徹底的に排除する策略をめぐらせてきた。

イ 女性性は男性が男らしく行動するように支える一方で、自身も軍事化された男らしさを模倣してその正当性の強化に貢献することもある。

ウ 軍隊による「『男』にする」訓練を通じて「生来の戦士」ではなかった少年が生来の暴力性を取りもどしてしまうことを歴史は伝えている。

エ 武力行使に従事しない男性は、非合理的、男らしくない、転覆的と見なされ、弱者、保護を必要とする者として女性化される。

オ 戦争は男性が女性や子供を保護する目的で行われるため、ホモソーシャルな絆で結ばれた人びとはハラスメントや暴力にさらされる。

問七 傍線部D「なかには、軍事化の原因を「家父長制」と名指すフェミニストたちもいる」とあるが、「家父長制」に関するフェミニストの議論について述べた次のア～オのうちから最も適切なものを選びなさい。

ア コウバーンは、女性の安全とは自宅で男にふるわれる暴力から逃れることであり、国境を守ったり他民族を追いついたりすることとは関係ないと捉えた。

イ コウバーンは、平和を持続することを困難にする戦争が根源的要因となり、家父長的なジェンダー関係が暴力の導火線のように機能したと考えた。

ウ エンローは、特定の男らしさが他の男らしさと女らしさに対して特権化する制度が軍事主義の原因となり軍事化を推進してきたプロセスを分析した。

エ リアドンは、性差別の原因が戦争システムという社会的暴力であることを論じ、戦争によつて制度化された家父長制に対峙する必要性を訴えた。

オ モーハンティは、「家父長制」という用語を躊躇するようになったフェミニストに苛立ち、均一で非歴史的な権力構造による分析が欠かせないと認識した。

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

^Aドイツ映画『THE WAVE ウェイヴ』(二〇〇八)は、ドイツの高校で教師がはじめた「独裁制」の体験授業が、生徒たちを過激な行動へと駆り立てていくさまを描いた映画である。

「独裁制」をテーマとする実習を担当することになった教師ヴェンガーは、授業の最初にクラスの生徒たちに向かって「独裁とは何か？」と問いかける。だが生徒たちはまったく興味を示さず、自分たちには関係ないという態度をとる。「もうドイツでは独裁はありえない。そんな時代じゃない」。そうした無気力な生徒たちを奮い立たせようと、ヴェンガーはクラスを独裁国家に見立てた大胆な体験型の授業を開始する。

彼はまず、自分のことを「様」付けて呼ぶよう指示し、発言の際には挙手と起立を義務づける。指導者を敬い、その指示に従うことが、独裁制の成立には欠かせないからだ。とはいえ、独裁制は上からの強制だけによって成立するものではない。下からの支持、集団の一体感にも支えられなくてはならない。それゆえ、ヴェンガーはクラスの仲間同士が助け合い、一致団結して自分たちの力を示すこと、さらに共通の制服として白シャツを着ることも要求する。

最初は渋々従っていた生徒たちも、教室で一斉に足を踏み鳴らしたりしているうちに、徐々に授業にのめり込むようになっていく。今まで経験したことのない一体感に魅せられた彼らは、独自の敬礼を導入したり、ロゴマークを制作したりして、集団への帰属意識を強めるようになる。だがそれは、クラスが教師のコントロールを失って暴走しはじめたことを意味していた。「自分たちが力を合わせれば何だってできる」。そうした危険な万能感にのみ込まれた生徒たちは、やがて異を唱えるメンバーを排除し、外部の敵を攻撃するなど、本当の独裁国家の支持者のようにふるまいはじめるのである。

ヒトラーの独裁は過去の話ではなく、現代でも容易にくり返される。そのことを説得的に描き出した映画『THE WAVE ウェイヴ』の内容は、「ナチズムがなぜ多くのドイツ人の心をとらえたのか」を長年研究してきた筆者の問題意識と大きく重なるものであった。

そこで筆者は二〇一〇年から毎年一度、勤務先の大学で担当している講義科目「社会意識論」(受講生約二五〇名)のなかで、この映画のシナリオを下敷きにした「ファシズムの体験学習」と題する二回の特別授業を実施するようになった。その内容は簡単に言うと、教師扮する指導者のもとと独裁体制の支持者となった受講生が敬礼や行進、糾弾といったデモンストレーションを実践することで、ファシズムが生まれる仕組みとその危険性を体験的に学んでいくというものだ。

この体験授業の狙いは、集団が暴走することの怖さを受講生に身をもって実感させ、ファシズムに対する「免疫ⁱⁱ」を付けてもらうことにある。もちろん倫理上の問題を含む授業であり、心理的な影響も懸念されるため、実施にあたっては細心の注意を払い、危険な行為を防止する対策も講じて

いる。

一回目の授業は、ほぼ映画『THE WAVE ウェイヴ』のシナリオの通りに、教室でファシズムの成り立ちを学ぶ。まず最初に授業実施上の注意事項を伝えた上で、独裁的な政治形態をとるファシズムにとって指導者の存在が不可欠であることを説明し、教師がその指導者（「田野総統」）となることを宣言、全員に拍手喝采で賛同させる。満場一致で指導者を承認することが、独裁制の成立に向けた第一歩だ。

そして教師Ⅱ指導者に忠誠を誓わせる敬礼（右手を斜め上に挙げて「ハイル、タノ！」と叫ぶ）を導入し、教室でその敬礼と行進の練習を何度かおこなって、集団の力の大きさを実感させる。この練習の際、「もっと大きな声で！」「足を強く踏み鳴らして！」などと教師が煽ると、最初ためらいがちだった受講生の声は徐々に大きくなり、足踏みの音も揃ってきて、最後には教室中が轟音に包まれる。

さらに受講生を友達グループから引き離し、教師の指示への従属を強める目的で、誕生月ごとに座るよう席替えをおこなう。そしてこの指導者と支持者からなる集団（「田野帝国」）の目に見える標識ⁱⁱⁱとして制服とロゴマークが重要であることを説明し、次の授業に指定の制服（白シャツとジーパン）を着てくるよう伝える。

二回目の授業は、制服を着用して出席した受講生に対して、敬礼と行進の練習をさせるところからはじまる。ほぼ全員が同じ白シャツとジーパンを着て「ハイル、タノ！」と叫ぶさまは壮観だ。制服の効果は圧倒的で、声も足踏みの音も明らかに前回より迫力がある。

次いで前回の授業のまとめをおこなうが、その途中で私語をして授業を妨害する派手なシャツを着た出席者（事前に用意したサクラ）を注意し、教室の前に引きずり出して、見せしめのため首にプラカード（「私は田野総統に反抗しました」と書かれている）を掛けて立たせる。教室内は静まり返り、受講生は固唾^{iv}を飲んで様子を見守っている。

一件落着後、集団の標識となるロゴマークの作成に入る。拍手による投票で三つの候補から選んだロゴマークをガムテープの切れ端にマジックで記入し、ワッペンとして胸に付けてもらう。さらに集団の目標として大学構内の「リア充」（カップル）の排除を掲げ、彼らを糾弾する掛け声（「リア充爆発しろ！」）の練習と合わせて、再度敬礼と行進の練習をおこなう。

その後、教室から大学内のグラウンドに移動しておこなわれるのが、授業の山場である屋外実習だ。異様な集団を見ようと集まった多くの野次馬（一般の学生）が見守るなか、グラウンドに整列した参加者はまず数回「ハイル、タノ！」の敬礼をおこなって教師Ⅱ指導者に忠誠を誓い、笛の音に従って誕生月ごとに隊列行進をおこなう。この段階ではまだ声も歩調もあまり揃っていない。

だが次にグラウンドの脇に座るカップル（これも事前に用意したサクラ）を集団で取り囲み、拡声器の号令に合わせて「リア充爆発しろ！」と糾弾しはじめると、参加者の声は明らかに熱を増し

てくる。何度も大声で怒号を浴びせられたカップルがたまらず退散すると、参加者の間には誇らしげな表情が浮かぶ。三組のカップルを退散させ、拍手で目標達成を宣言した後、教室に戻って実習は終了となる。

この糾弾行動は映画『THE WAVE ウェイヴ』にはない脚色で、不測の事態を防ぐと同時に、授業の効果を高める目的で導入したものである。攻撃対象となる敵役を用意した上で、教師の号令のもと受講生にこれを糾弾させれば、攻撃的衝動をコントロールしつつ発散させることが可能となり、集団行動の危険性をより鮮明に印象づけることができる考えたのである。

以上のような一連のパフォーマンスを通じて、受講生は教師に指示されるまま集団に合わせて行動しているうちに、本来なら良心がとがめるような悪行に加担することになるわけだが、その過程で自分を含む集団の意識がどう変化するかを観察し、ファシズムの危険性がどこにあるかを認識するようになる。それがこの授業の狙いである。

過去一〇回の授業では受講生の参加意欲はきわめて高く、授業の狙いを的確に理解して、集団心理の働きに対する認識を深めているようだ。屋外実習の後に書いてもらったレポートからは、受講生が集団で一緒に行動しているうちに気持ち^Bがどんどん高ぶってきて、社会的に許されないような行為にも平気になってしまう様子が読みとれる。

だがそれにしてもなぜ、このような意識の変化が生じるのだろうか。同じ制服を着て指導者の命令に従うだけで、どうしてもして人は過激な行動に走ってしまうのか。実習後の授業で筆者はレポートの内容を以下の三つの論点に整理して、受講生がみずからの体験をファシズムの危険性に対する認識につなげることができるよう、詳細なデブリーフィング（被験者への説明）をおこなっている。

① 「集団の力の実感」

全員で一緒に行動するにつれて、自分の存在が大きくなったように感じ、集団に所属することへの誇りや他のメンバーとの連帯感、非メンバーに対する優越感を抱くようになる。

「大声が出せるようになった」「リア充を排除して達成感が湧いた」といった感想が示すように、参加者は集団の一員となることで自我を 1 させ、「自分たちの力を誇示したい」という万能感に満たされるようになる。カップルに何度も怒号を浴びせているうちに参加者の声が熱を帯びてくる様子にも、そうした変化を見とることができる。しかもそれが制服やロゴマークといった仕掛けによって促進されていることも重要である。

② 「責任感の麻痺」

上からの命令に従い、他のメンバーに同調して行動しているうちに、自分の行動に責任を感じなくなり、敵に怒号を浴びせるという攻撃的な行動にも平気になってしまう。

「指導者から指示されたから」「みんなもやっているから」という理由で、参加者は個人としての判断を停止し、普段なら気がとがめるようなことも平然とおこなえるようになる。そこには権威への服従と集団への埋没が人びとを道具的状态（2）に陥れ、無責任な行動に駆り立ていく仕組みを見出すことができる。最初はまとまりのなかった参加者が教師の指示や周囲の動向に影響されて徐々に一体感を強め、積極的に大声を出すようになるのも、そうした他人任せの姿勢によるところが大きい。

③ 「規範の変化」

最初は集団行動に恥ずかしさや気後れを感じていても、一緒に行動しているうちにそれが当たり前になり、自分たちの義務のように感じて真剣に取り組みはじめる。

「リア充が憎らしく思えた」「声を出さない人に苛立った」といった感想が示すように、参加者は上からの命令を遂行するという役割に順応し、集団の規範を自発的に維持・強化するようになる。これは人びとが自分の行動の責任を指導者に委ね、その命令を遂行することにのみ責任を感じはじめるという、状況的義務への拘束が生じていることを意味している。参加者はいつの間にか、教師と一緒に授業をやり遂げようとする3に変貌してしまうのだ。

^c 以上の三点のうち、①「集団の力の実感」は私たちが身近に経験しているものである。運動会の入場行進、サッカーの試合の応援、夏祭りの神輿巡行などに参加して、えも言われぬ興奮を覚えた経験は誰にでもあるはずだ。この種の集団行動はいつの時代にもどんな場所にも存在するもので、普通は一時的な高揚感を呼び起こすにとどまる。それが危険なファシズムへと変貌するのは、集団を統率する権威と結び付いたときである。

集団行動が権威と結び付くと、まず生じるのが②「責任感の麻痺」である。^{*} 監獄実験やミルグラム実験の結果が示しているように、権威への服従は人びとを道具的状态に陥れ、自分の行動の結果に責任を感じなくさせる働きをもっている。そこではどんなに過激な行動に出ようと、上からの命令なので自分の責任が問われることがない。逆説的なことに、権威に従属することによって人は行動に伴う責任から解放され、社会的な制約から「自由」に行動できるようになるのである。

しかもこうした治外法権的な状況が成立すると同時に、これを維持・強化しようとする動きが服従者の側から自発的に出てくる。それが③「規範の変化」である。人びとは上からの命令に従って敵を攻撃するという行動を正当なものと見なし、内面的・情緒的な関与を強めていく。芝居とわかってはいる行動であっても、人びとの義憤を駆り立てる危険な力を発揮しうるのだ。

こうして敵は容赦なく攻撃すべき「悪」となり、これを攻撃する行動は「正義」となる。自分は権威＝善の側に立ち、その後ろ盾のもとで悪に正義の鉄槌を下すという意識なので、攻撃をためら

わせる内面的な抑制は働かない。それどころか、この「義拳」の前に立ちはだかるいかなる制約も正義を阻む脅威と見なされ、「自衛」のためにさらなる暴力の行使がもとめられることになる。

敵や異端者への攻撃のなかで、参加者は自分の抑圧された攻撃的衝動を発散できるだけでなく、正義の執行者としての自己肯定感や万能感も得ることができる。そこに認めることができるのは、暴力が歯止めを失って過激化していく負のスパイラルである。

このようなファシズムの危険な感化力は、私たちにも無縁のものではない。近年わが国では在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチが大きな社会問題となっているが、民族的出自の異なる人びとへの憎悪や敵意を煽る加害者たちの差別的・排外主義的言動が、権威と結び付いた集団行動の過激化のパターンをなぞっていることは明らかだ。

差別的な言動をくり返す加害者たちの内面的な動機に迫る上では、彼らがそうした活動のなかで感じる解放感、自分の感情を何の制約も受けずに表現できる「自由」の経験に注目することが必要だろう。「日本」というマジョリテイの権威を笠に着ながら、数の力で社会的少数派や反対派に攻撃を仕掛けるという行動は、権威への服従がもたらす「責任からの解放」の産物である。彼らはこれによって存分に自分の欲求を満たしながら、堂々と正義の執行者を演じることができる。その何物にも代えがたい快感にこそ、ファシズムの危険な魅力があると行ってよい。

「ファシズムの体験学習」から得られる教訓は、ファシズムが上からの強制性と下からの自発性の結び付きによって生じる「責任からの解放」の産物だということである。指導者の指示に従ってさえいれば、自分の行動に責任を負わずにすむ。その解放感に流されて、思慮なく過激な行動に走ってしまう。表向きは上からの命令に従っているが、実際は自分の欲求を満たすことが動機となっているからだ。そうした下からの自発的な行動をすくい上げ、「無責任の連鎖」として社会全体に拡大していく運動が、ファシズムにはかならない。

この単純だが危険なメカニズムは、いくぶん形を変えながら社会のいたるところに遍在している。学校でのいじめから新興宗教による洗脳、さらには街頭でのヘイトデモにいたるまで、思想の左右を超えた集団行動の危険性を、私たちはあらためて認識する必要がある。世界中で排外主義やナショナリズムの嵐が吹き荒れている今日、ファシズムの危険な魅力に対処する必要があります。高まっている。大勢の人びとが熱狂に駆られて「正義の暴走」^Dに向かったとき、これに抗うことができるかが一人ひとりに問われているのである。

（田野大輔「ハイル、タノー！ 我が生徒たちとのファシズム体験」一部改変）

* 監獄実験・ミルグラム実験……閉鎖的な状況における権威者の指示に従う人間の心理状況を検証する実験

問一 波線部 i～iv の言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i デモンストレーション

- ア 既存の枠組みを解体し、新たに構築し直すこと
- イ 目上の者に対して、ことの次第を申し述べること
- ウ 主義や主張を掲げて、団結の威力を示すこと
- エ 対象の意識を他へ逸らすために、行動を起こすこと

ii 免疫

- ア 物事がたび重なるにつれて慣れていくこと
- イ 権威や権力に対して従うふりをする事
- ウ 外部の環境に抗って自分の行動を変えること
- エ 特定の行為に馴染んで上手になっていくこと

iii 標識

- ア 情報を区別しやすく示すために便宜的につけるもの
- イ 後で揃えて証拠とするために当事者間で所有するもの
- ウ 特定の事物を表すためにそれに近接する事物で置き換えるもの
- エ 全体的な概念を伝えるためにその一部分を示すもの

iv 固唾を飲む

- ア 口には出さず心の中にたくらみを抱く
- イ 事の成り行きが気がかりで緊張している
- ウ 大きな恐怖のために顔色が青ざめて見える
- エ 一度言ったことを無責任にひるがえす

問二 空欄

1

3

に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 ア 実体化

イ 肥大化

ウ 矮小化

エ 相対化

2 ア 自分の意志の道具となる状態

イ 自分の意思を道具として使う状態

ウ 他人の意志の道具となる状態

エ 他人の意志を道具として使う状態

3 ア 偽善者

イ 共犯者

ウ 異端者

エ 代弁者

問三 傍線部A「ドイツ映画『THE WAVE ウェイヴ』」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ヴェンガーは独裁制の成立を生徒たちに体験させるために、自分を「様」付けで呼ぶよう義務づけた。

イ 生徒たちが敬礼を考案したことは、クラスを独裁国家に仕立てようとしたヴェンガーの思惑通りであった。

ウ ヴェンガーはクラスを独裁国家に見立てた授業を行うために、独裁制に無関心な学生を鼓舞することから始めた。

エ 自ら万能感を欲した生徒たちは、外部の敵を攻撃したり意見の異なるメンバーを排除したりした。

オ ヴェンガーはクラスの仲間同士の助け合いや一致団結の象徴として、ロゴマークの導入を提案した。

問四 傍線部B「社会的に許されないような行為にも平気になってしまう様子」とあるが、この状況に至る経緯について述べた次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

ア 教師が独裁的に振る舞う指導者に就くことについて、受講生は拍手喝采とともに承認させられた。

イ 教師は受講生がみずからの指示に従順になるよう、受講生に誕生月ごとに座るよう指示した。

ウ 教師は指導者への忠誠が不足している受講生を浮き彫りにするため、敬礼と行進の練習をさせた。

エ 教師は「大学構内からのカップルの排除」という集団の目標をふまえて、受講生に掛け声を練習させた。

オ 受講生がカップルを糾弾する声は、拡声器の号令によって熱を増し、怒号と化した。

問五 傍線部C「以上の三点」とあるが、これらの論点について述べた次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

ア 他のメンバーと共に上からの命令に従うことを通して、自分の行動の結果に責任を感じにくくなる。

イ 集団行動のえも言われぬ興奮はいつでも見出せるありふれたものだが、ファシズムの起点のひとつとなる。

ウ 治外法権的状况に感じる恥ずかしさや気後れが強ければ強いほど、集団行動における高揚感は大くなる。

エ 当初は上からの命令で敵を攻撃する演技をしていても、いつのまにか主体的に攻撃するようになりうる。

オ 正義を阻む脅威に対する義拳という認識のもとで、通常なら他者への攻撃をためらわせる内面的抑制は働かなくなる。

問六 傍線部D「正義の暴走」について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア ファシズムの感化力は、メンバーの抑圧された攻撃的衝動の発散と、自らを「善」の側になぞらえられる全能感の獲得が循環することで強くなる。

イ 自分の感情にまったく制限をかけずに表現する「自由」の意義は、ファシズムの危険性とは分けて考える必要がある。

ウ 民族的出自の異なる人びとへのヘイトスピーチや差別的排外主義的言動は、必ずしもファシズム成立の構造と関係があるわけではない。

エ 人びとは「正義」と「悪」をしっかりと峻別することで、世界中で高まる排外主義やナショナリズムの動きを抑制できる。

オ 在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチのとめない拡大は、ファシズムとナショナリズムが完全に同じ構造を共有していることを示す。

カ ファシズムという運動において上からの強制的命令が目につくものの、実際は下からの自発的行動が喚起される点が重要である。